

発掘調査の概要

飛鳥寺東南部の調査（飛鳥藤原第152-5次）

2008年11月、飛鳥寺の東南隅、飛鳥寺瓦窯のある丘陵の西で、倉庫建設にともなう発掘調査をしました。すぐ北側は1979年に調査されており、飛鳥寺南限の築地塀、掘立柱建物・塀、木樋、石組溝などがみつかっています。なかでも2間×2間の総柱建物は、道昭が飛鳥寺の東南隅に建立した東南禅院の経蔵として注目を集めました（現在は万葉文化館のある飛鳥池遺跡の北側とみる見解が有力です）。そのすぐ南を発掘することから、当然これらの遺構の続きがでてくるものと思っていました。しかし予想に反して、これらはまったく姿を現しませんでした。

かわりにみつかったのが、飛鳥寺の南方にあった通称「石敷広場」の東北コーナー部です。西に向かって北に約8度方位が振れる幅約20mの石敷です。北縁と東縁には大型の石を据え、その内側には川原石を敷いています。注目されるのは、石敷広場のすぐ東側にあった階段状の石組溝です。最上層では幅2.6mもある巨大なものでした。この石組溝は北へと延びていきますが、1979年調査区ではみつかっておらず、その行方が気になるところです。

それにしても、石敷広場の正体は何でしょうか。飛鳥寺は正方位にのっとって造営されていますが、なぜか石敷広場は方位が振れています。飛鳥寺の西には「槻の木広場」があり、さまざまな儀礼の場として機能しました。飛鳥の宮殿と槻の木広場を最短ルートで結ぶため、方位が振れたのでしょうか。

（都城発掘調査部 市 大樹）



石敷広場の東北コーナー部（西から）